

地域子ども・子育て活動支援助成事業 実施報告書(別紙2)

団体名	おいでおいでルーム
-----	-----------

取組の名称	みんなが安心して寛げる居場所づくり オンライン子育てサロンおいでルーム開設
実施場所	川崎市中原区下新城2-7-15
対象地域	全区と横浜市
対象地域の 特色・課題	<p>●隣近所づき合いが行われた時代は、家庭が崩壊するとか子どもが育たなくなってしまうということはなかった。それは社会との連携で、子どもが育つ環境があったからである。ところがコロナ禍が続くなか、家庭が社会的に孤立し、親子が疎遠な関係になり、人間が人間でなくなっている。</p> <p>言い換えれば一つの関係の中、子どもが育つ状況でなくなっている。</p> <p>○コロナ禍は更に続く。空き店舗活用から移転して自宅開放のおいでルーム(以下ルーム)は、緊急事態宣言が発令された7月末から8月末迄居場所の利用を控え、絵本や遊具の貸し出しの『立ち寄り場』として開放、それ以外は自分の命は自分で守る方法を徹底させ予約利用を活用し対面での居場所提供を続けた。結果、利用者のコロナ発症はなかったが、家族が罹患し利用ができなくなったケースや近隣の小学校・幼稚園等での発症が続く中、情報を共有しながら、行き場のない親子が利用できる環境を整え提供した。</p>



●コロナ禍で感染リスクが高いことから、親子の居場所利用がほとんどできない現状と、働き方の変化で生活に不安が続き、地域社会と人とがつながり、安心安全に子どもが育つ、寛げる「おうち＝実家」的な居場所の必要性が求められている。

○ルームの環境に慣れるまで時間はかからなかった。あっという間に子どもが親が慣れ、遊び始めるまでの導線が出来た。室内もお日様が入り、換気や消毒も十分に行い目に見える環境が一層の安心となり『子育てで疲れている心が和み実家に帰ったようです』とありがたい言葉であった。

○ルームは、10 時からの室内遊びが始まり、11 時になると近隣の公園やせせらぎ遊歩道に散歩に出かけ、その後お腹を空かしてのランチとなる(この間離乳食児は食べる)食後満足のなかでひと遊びして 13 時終了となる。

そのリズムができているため、自ら能動的にお片付けや戸外に行く準備をするまでに異年齢で育ち合った。



取組の趣旨・目的

●利用者とその家族は、コロナ禍で共通の悩みを抱えその多くが、行き場のない心の問題であった。家庭の中に於いても距離感がなくなり、日々の嫌なことや辛いことを抱え込まずに話せる場が身近な社会のなかであって、そこに信頼できる人がいて、いつでも話せて相談できるという安心感が明日への力になった。

○ルームもいろんなケースがあった。ママの病から公的機関と連携し途中保育園に入園家庭の困難さを救った。就園に向け言葉の遅れや気難しく凸凹を持った子どもの利用も平等に受け入れ、療育機関等と連携親の軽減も含めた必要なサポートを実施した。特に言葉の遅れた子どもの利用は遊びや生活面で、発達を促す方法(利用回数を増すための経済的負担の軽減)をボランティアママと共有して、会話が出来るまでに育ったことを喜び分かち合った。

●少子化のなかで子どもや子育ては、国の大事と声高に叫ばれているものの、凸凹を持ち合わせた子どもや虐待・貧困・いじめや校内暴力など、子育ての大変さばかりが広がっていて、楽しい子育てどころではないが、幾つかの大事な事だけを押さえておけば、子どもはどんどん自分で成長してしっかり育っていくというメッセージの発信を更に続けていきたい。

○ルームの利用者さんとスタッフ他で決めごとを共有した。まず子どもの意思を尊重し『やってみて・させてみて・身につけて』を遊びやランチを通して、機会あるごとに解決策を模索しみんなの学びとした。

特に利用者同士のトラブルは『貸して・後で・待ってね・ありがとう』等、年齢と個人差を大事に仲立ち関わり、関わる方法を身につけ遊びが友だちへの関心と関わり遊びに発展、親もボランティアも見守る中で過ごせるようになった。0・1歳児もその様子をじっと見て視覚からの刺激を受けて育っている。

<具体的な育ちのメッセージとは>

◎母子関係は1歳から1歳半までに作られ、この時期に気に入った遊具で遊び始めたならば、遊びの欲求を見守り満たすことを大事にしよう。

◎子どもの育ちと咀嚼力に合わせた離乳食をすすめ、自分で食べる意欲と食べるリズム(間)を大事に見守り必要な時に手助けしよう。

◎コロナ禍であっても、家族が協力しあい、健康の源である早寝早起きの生活リズムで過ごそう。

○コロナ禍の二年間妊娠出産が少なかったが、年間で離乳食児が6人アレルギー対応しながら、家庭と共に進め意欲的に食べる子どもに育った。

また、10時に利用することで生活にリズムにメリハリができ、就園前の子どもには良い生活習慣となった。

●多くの子どもと接して、家庭内で育つ人間関係は2歳から3歳頃に一応育っている。ところが家庭の外、お友だちへの関心等、社会で育たなければいけないことが育っていない。それは、家庭の人間関係がパターン化して学ぶことが限られている。集団に入る前に生活経験を身につける学びの場所としても、社会と繋がっている安心の居場所が必要である。

○0歳児は母親を基地として育ち、1歳児は積み重ねで距離感が出来て2歳児の遊ぶ姿を一番に吸収、お邪魔しながら生活経験を積み重ね、表情も豊かになり母親が驚く。子どもは子どもの関わりの中で育つことを実証してくれた。

	<p>●1・2年と利用して、生活経験を積み重ねた子どもでもでさえ、生まれつきの『育ち難さ』は、なかなか集団に適応できず、安心できる居場所との繋がりは、心理職も含めて更に学童まで続くケースが多くなった。</p> <p>○ルームの中でどうしても他児と比べてしまうのは仕方がないが、人間関係を構築する中で、4月と3月生まれでは当然違うことを遊びや生活を通して理解して頂き、1年後の姿に想いを馳せ、利用時には楽しく遊ぶことに努めた。何より成長の姿をみんなで見守り共感共有することで、みんなの励みになった。</p> <p>利用者の兄弟・姉妹ケースで、学童になっても心配なケースは、心理職にメールや対面での相談を受け経過を見たケースもあった。</p>
<p>実施内容・実施スケジュール</p>	<p>《活動内容》</p> <p>●実施期間：年間を通して実施</p> <p>○コロナの緊急事態宣言を受けながら、家庭状況把握が必要なケースもあり工夫し対面での提供を続けた。行く場所がなく大変ありがたかったとイベントの感想文の中に書かれていた。</p> <p>●利用プラン：</p> <ul style="list-style-type: none"> * 利用日 月曜日・木曜日(月に1回の特別水曜日は(幼稚園児対象)) * 利用定員 予約制 4組限定(4～6人兄弟も含む)上限5組 * 利用時間 10時～13時(水曜日は11時～13時) * 利用料金 1回500円(設備使用及び環境整備を含む) <ul style="list-style-type: none"> ※水曜日は幼稚園児対象200円 * 手作りランチ代 大人600円・子ども300円 <ul style="list-style-type: none"> ※離乳食提供と指導=300円(お弁当持参でも利用可) <p>○プランの内容の変更はなかった。</p> <p>コロナ禍の影響か年々子どもの数も減少、事業運営は決して楽なものではなかったが、家賃支払いがないことと、補助金がボランティアの励みになっていることが気持ちの余裕に繋がった。</p> <p>●イベント内容:(コロナ感染状況次第で変更あり)</p> <p>(1) 0・1歳児対象に月1回、少人数制の親子保育を実施 『0・1歳児集まって!』10時～13時</p>

遊びや食事を通して母子関係や遊びの育ちを助長する。

* 料金は 2,000 円(利用代とランチ代含む)

* 心理職は 9 月に関わり発育発達を助言する

○計画が緊急事態宣言と重なり実施ができなかったが、通常の利用のなかで積極的に心理職が関わり育ちを促した。専門職が関わることで母親が一番安心していた。

(2)2 歳児対象に単独で年 4 回(内 1 回は一緒)母子分離のプレ保育を行う

* 『2 歳児遊ぼう!』10 時~13 時

幼稚園年少児入園に向けて、社会性や運動面の育ちや友だち関係
食事状況(お弁当にも慣らす)・身辺自立に向けての育ちを助長する。

* 料金 3,000 円(報告書付)

* 開催月(7・10・12・3 月)ランチ代含む

* 全ての月に心理職が関わる

○コロナ禍の状況次第であったが、二歳児が 9 人と多く毎週金曜日『二歳児特別利用日』を設け、2 グループに分けて関わりを深め育ちを助長した。
その結果幼稚園に入園後の様子をうかがうと、安定して過ごしているとのこと改めて社会性の育ちの大切さを子どもから学んだ。



(3)地域や元利用していた幼稚園児への居場所の提供

「ルームで遊びたい・どうしていけないの」との要望に応じて、月 1 回水曜日幼稚園降園後ランチ付きプランで寛げる居場所を提供する。

* 利用代(200 円)・ランチ(300 円)

○幼稚園や小学校がコロナの影響でなかなか思うような通学通園できないなか、ルーム利用が増え、幼稚園児と二歳児が楽しくかかわっている姿は微笑えましく良い刺激となり更なる育ちになった。



(4)個別子育て相談（対面式）

発達心理職澤井晴乃先生による子育て相談と経過観察

- * 0・1 歳児・2 歳児イベントと連携、イベント終了後に実施予定
- * 事前予約制 & 有料(1 時間 3,000 円)

○コロナ禍で思うように心理職も来日ができなかったが、相談などはルームが仲立ちとなり通信での関わりになったが、2歳児のイベントは心理職が入り、育ちの様子を見て、直接親にアドバイスをしてその後の育ちに繋げた。直接のアドバイスが自信につながり励みにもなった。

(5)食育の推進

- * 子どもの発育・咀嚼力にあった離乳食を勧める。
(離乳食のつくりや与え方も導く)
- * 食事は、楽しい・嬉しい・美味しく食べる家庭的なランチを提供
- * 季節の習わしと季節感を大事にして、地場産の野菜をできるだけ使用、食品に対する過敏や好き嫌いを無理強いしないで、個別に対応、時間をかけて食品数を増やす。(好物が一つでもあればよい)
- * アレルギー児に対する食育もできる限り答える。

○生まれつき感覚に敏感な子どもが多くなったと感じる。それは味覚であり感触でなる等個々によって違うが、その違いを認め特に食事は好きな物が一品あれば良いと、主食は『ご飯のみ・味がないと食べない・ふりかけや海苔以外には食べない』副菜も同じであった。それを認めあう関係を積み重ね、食事に関する意欲低下を親子共々フォロー楽しく食べることを大事にした。



(6)日常生活に役立つ「時短でつくるお惣菜」を開催

子どもは、離れない・泣く・抱っこをせがむ、夕方になると機嫌が悪い等、思うように食事の支度ができない悩みを母親は何時も抱えている。子どもも喜ぶ時短で作る素材を準備、手間や工夫やコツを体験料理を作る悩みが喜びになるよう学びあう。

*コロナ感染状況をみながら、少人数制で開催する。

*開催月予定 5月・7月・9月・11月・2月とする。

*参加費 1,000円

○やってほしいという要望があり、コロナの状況を見ながら4・5・6・11月に実施した。通常利用時に食べる惣菜ランチを子育てしながら時短で作るコツを伝授した。あったら便利で重宝するもの『じゃがいもは茹でてストック・キャベツは千切りにして少しの塩でキャベツ玉をつくる・卵焼きには少量のお酢を』など、見て聞くだけでなく、実際に調理し味見して学ぶ。感想から、料理の手順や考え方を多く知り目からうろこと書かれていた。その後参加者の家庭に於いても活かされている。



●新事業導入事業『オンライン子育てサロンおいでルーム』開設

○何時でもアクセスできる会員制『オンライン子育てサロンおいでルーム』を準備時間を経て開設。*会員登録料 1,000円 としたが、その後当面試行段階を継続無料化とする。本格的な運営まで試行錯誤の状況である。

○サロンの普及と会員数増加に伴うコンテンツ拡充として、おいでルームのイベントのオンライン同時発信を積極的に実施する。また、収益にこだわる運営ではなく、時代に合った通信方法として、次年度4月から『おいでルーム公式インスタグラム』の準備している。

参加者の年代	未就園児と その保護者	定員 (1回あたり)	4家族【上限5家族】 4～8人(兄弟関係)
実施頻度	週二回(月・木) 月1回(水)	活動日数 (年間)	140日
スタッフ体制	<p>代表1名・スタッフ2名 ボランティアママ6名 (他1名は神経発達症傾向を持つ、開所当時から関わっている)</p> <p>○ルームがおうちルームになってもスタッフ、ボランティアママの体制は同じで利用者さんが一番に安心している。</p>		
連携する団体・ 連携の手法	<ul style="list-style-type: none"> ● 中原区総合子育てネットワーク、中原区ボランティア部会、保健センター、療育機関等と連携 ● 親子で楽しむ音楽療法士による参加型の音楽プログラムを取り入れる。 ● 地域交流はコロナ禍により難しいが、できることを見極め参加する。 ● 利用時におきた地震や災害などに対応できる物質を整備備蓄する。 <p>○ コロナ禍で集合しての会議や相談ができない現実、通信を使用しての新しい方法で意思疎通を図り、連絡を取り合えた事は社会の状況把握に繋がった。</p> <p>○ 地震や災害を他人事ととらえるのではなく、その都度スタッフやボランティアママと確認、対応ができるように努めてきた。</p>		
取組実施により 見込まれた効果	<ul style="list-style-type: none"> ● コロナに負けず一年間事故も怪我もなく楽しく居場所の提供が出来た事に安どした。これも利用者さんの協力とチームワークに感謝したい。 ● 計画にはなかったが、心のよりどころとして親子で「音遊び」を取り入れ、季節感や流行の曲目を歌う。また楽器遊び等も含めて、月1回程度楽しむ機会に恵まれた。 ● 何より各年齢特に2歳児(2022年4月に年少組入園)の育ちが謙虚に育ちここに至るまでのたくさんの人のお力と愛をたたえたい。 ● コロナ禍であるゆえに対面での厳しさもあったが、自分の命は自分で守る方法を常に点呼実施、この先もなかなか見通しが見えない日が続くが、社会情勢にあった安心できる居場所の提供を模索し次年度も継続する。 		